様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2018～2021
課題番号：１７ＫＫ００４９

研究課題名（和文）高齢期の意思決定バイアスの国際比較：多様な価値観に応じた自律支援を目指して

研究課題名（英文）Cultural Comparison of Decision Making in Older Adults: For Autonomy Support According to Diverse Values.

研究代表者
増本　康平（Masumoto, Kouhei）

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：２０４０２９８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,200,000円
渡航期間：　10ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究では，高齢期の意思決定に関する先端的な研究を実施しているスタンフォード大学長寿センターに滞在し，相互独立を背景とし自己決定を尊重するアメリカ人と，相互協調的な判断を重視する日本人の人生の価値の認識や価値の行動への反映を比較し，well-beingとの関連性を検討した。研究の結果，意思決定に影響する行動の価値は文化的背景によって異なり，人生の締めくくりの意思決定においても，個々人の置かれている文化や社会といった環境要因を理解し，さらに，その文化的背景によって加齢の影響も異なる可能性を念頭に意思決定支援につなげる必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
加齢にともない身体的・心理的健康が損なわれ，自立した生活が困難な状況となっても，生活の質（QOL）を維持するには，個人的なことがらを意思決定できる「自律」が重要となる。しかしながら，良い意思決定の基準は文化的背景によって異なると考えられる。例えば，個人的な幸福の追求を擁護・促進することに価値をおく欧米の相互独立文化と，社会的秩序や人間関係に価値をおく相互協調文化では，意思決定時に重視する価値が異なっている可能性がある。本研究は，文化的価値観の違いを明確にすることで，多様な価値基準に応じた意思決定支援方法の確立を目指す。

研究成果の概要（英文）：In this study, I vistied at the Stanford Center on Longevity, which is conducting advanced research on decision making for older adults, and compared the perceptions of life values and the reflection of values in behavior between Americans, who respect self-determination, and Japanese, who value interactive and cooperative judgment, and examined their relationship to well-being.
The results showed that the values of behavior that influence decision making differ depending on the cultural background. Therefore, it is necessary to understand the culture in which each individual is placed, and to support decision-making with the possibility that the effects of aging may differ depending on the cultural background.

研究分野：老年学

キーワード：意思決定　文化比較　高齢期

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

現在，我が国では 75 歳以上人口が 1500 万人を超えている。さらに，世帯形態の変化により 65 歳以上の高齢夫婦のみ世帯・高齢単身世帯は 1400 万世帯と全世帯の 26%を占めている。つまり，人生における重大な意思決定を，高齢者のみでおこなう場面が格段に増えている。加齢にともない身体的・心理的健康が損なわれ，自立した生活が困難な状況となっても，生活の質（QOL）を維持するには，個人的なことがらを自己決定（意思決定）できる「自律」が重要となる。

良い意思決定の基準は文化的背景によって異なる。個人的な幸福の追求を擁護・促進することに価値をおく欧米の相互独立文化と，社会的秩序や人間関係に価値をおく相互協調文化では重視される点が異なる(Matsumoto et al., 2008)。例えば，感情を相手に表出しないことは，欧米では不適応な感情調整とされるが，基課題では，日本人にとって感情を抑制することが不適応な方略ではないことが示された（Masumoto et al., 2016）。このような文化の違いによる情報処理の相違が，高齢期の意思決定に及ぼす影響について検討した研究は極めて少ない。

また，文化的価値観が意思決定に及ぼす影響を検討することも重要である。治療選択において，欧米では，患者が主体であり，本人が納得できることを重視した治療選択がなされる。一方，日本では，家族や周囲の意見・都合を考慮した選択のプロセスが重視される。文化的価値観の意思決定への影響を明らかにすることは，結果が不確実な困難な意思決定において，多様な価値観に応じた支援につながる。

２．研究の目的

超高齢社会において，自分らしい人生の締めくくりは重要な課題である。そこで近年注目されているのが ACP（Advance Care Planning）である。これは，もしもの時に備え，将来の医療及びケアについて，患者･家族と医療従事者があらかじめ話し合う自発的プロセスのことを指す。強調されているのが，年齢や病期にかかわらず，何度も話し合い，患者の医療現場における目標や選考だけでなく，どう生きるかといったより広範な価値を共有し，実際に受ける医療に反映させることである。普及啓発が進んでいる欧米に比べて，日本では ACP をよく知っていると回答したのは 3.3%にとどまっており，そもそも自身の人生の最終段階における医療について家族と話し合ったことがない人は 55.1%との報告もある（厚生労働省，2017）。自己決定の権利や法的環境等が整った社会文化的背景に裏付けられて欧米で発展した ACP をそのまま日本に導入することは難しく，普及を阻害する一因となっている。

そこで本研究では，高齢期の意思決定に関する先端的な研究を実施しているスタンフォード大学長寿センター（Stanford University, Center on Longevity）に滞在し，相互独立を背景とし自己決定を尊重するアメリカ人と，相互協調的な判断を重視する日本人の人生の価値の認識や価値の行動への反映を比較する。これにより，文化的価値観の違いを明確にし，多様な価値基準に応じた意思決定支援方法の確立を目指す。

３．研究の方法

対象者

WEB 調査を実施した。収集されたデータのうち，重複データ，信頼性の不確かなデータ等を削除した結果，分析対象となったのは，以下の通りであった。

日本人 1609 名：20 代 217 名（男性 57 名，女性 158 名，どちらともいえない 2 名），30 代 388 名（男性 107 名，女性 281 名），40 代 449 名（男性 172 名，女性 273 名，どちらともいえない 4 名），50 代 162 名（男性 77 名，女性 84 名，どちらともえいない 1 名），60 代 274 名（男性 131 名，女性 143 名），70 代 126 名（男性 69 名，女性 57 名）の計 1616 名であった。結婚経験がある人は 1020 名(63.1%)，子どもがいる人は 837 名(51.8%)，同居者がいる人は 1344 名(83.2%)，大病の経験がある人は 470 名（29.1%），親しい人との死別経験がある人は 1218 名（75.4%）であった。なお，性差についての統計分析を行う際には，どちらともいえないに回答した 7 名を削除した。

欧州系アメリカ人 2444 名：20 代 390 名（男性 194 名，女性 195 名，どちらともいえない 1 名），30 代 395 名（男性 194 名，女性 200 名，どちらともいえない 1 名），40 代 429 名（男性 214 名，女性 215 名），50 代 373 名（男性 195 名，女性 177 名，どちらともえいない 1 名），60 代 401 名（男性 193 名，女性 207 名，どちらともいえない 1 名），70 代 460 名（男性 233 名，女性 227 名）の計 2448 名であった。結婚経験がある人は 1866 名（76.2%），子どもがいる人は 1505 名（61.5%），同居者がいる人は 1707 名（69.7%），大病の経験がある人は 591 名（24.1%），親しい人との死別経験がある人は 2278 名（93.1%）であった。なお，性差についての統計分析を行う際には，どちらともいえないに回答した 4 名を削除した。

アジア系アメリカ人 1050 名：20 代 224 名（男性 104 名，女性 118 名，どちらともいえない 2 名），30 代 219 名（男性 88 名，女性 131 名），40 代 210 名（男性 93 名，女性 117 名），50 代 132

名（男性 54 名，女性 78 名），60 代 174 名（男性 90 名，女性 84 名），70 代 93 名（男性 45 名，女性 48 名）の計 1052 名であった。結婚経験がある人は 710 名（67.5%），子どもがいる人は 517 名（49.1%），同居者がいる人は 785 名（74.6%），大病の経験がある人は 178 名（16.9%），親しい人との死別経験がある人は 824 名（78.3%）であった。なお，性差についての統計分析を行う際には，どちらともいえないに回答した 2 名を削除した。

調査項目

属性：年齢，性別の他に，同居家族，結婚経験，子ども，死別経験，大病経験の有無を尋ねた。

価値の認識と価値に沿った行動： Personal Values Questionnaire II 日本語版（土井ら，2014）の「価値に沿った行動因子」に含まれる「生活の中でこの価値に対してどれくらいコミットしていますか（コミット：選択した自分の価値に沿って生活すること）」「過去 2－3 か月，私はこの価値に沿って生活ができた」を用いた。

心理的 well-being： Affect Valuation Index を用いて文化比較を行った一言（2015）の日本語版を参考に以下の 6 項目を肯定的感情感情として測定した。一般的な 1 週間を思い浮かべさせ，肯定的感情 6 項目（高活性：わくわくした，どきどきした，うきうきした，低活性：平穏な，落ち着いた，くつろいだ）に対してどの程度感じているかを，「全く」感じていないから「いつも感じている」の 5 件法で尋ねた。人生受容は，Ryff の心理的 well-being の理論的背景に基づき，一般成人用に開発された心理的 well-being 尺度（西田，2000）の下位因子のうち，自己受容尺度の項目表現を，自己に対する受容から，人生に対する受容に修正して用いた。7 項目に対して，「非常によく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの 6 件法で回答を求めた。

４．研究成果

（1）文化×年齢の比較

2 要因分散分析を実施したところ，「価値の認識」においては，文化による主効果（$F(5098, 2) = 568.15$, $p = .00$, $\eta^2_p = .18$；欧州系 ＞ アジア系 ＞ 日本），年代による主効果（$F(5098, 5) = 9.30$, $p = .00$, $\eta^2_p = .01$；20 代 ＜ 30-50・70 代；60 代 ＜ 30－50 代），文化と年代による交互作用の全てが有意であった（F（5098, 10）$= 3.77$, $p = .00$, $\eta^2_p = .01$）。欧州系アメリカ人は年代による有意差はないが，アジア系において 20 代 ＜ 30-70 代，日本人において 50 代 ＜その他の年代という結果となった（図 1）。

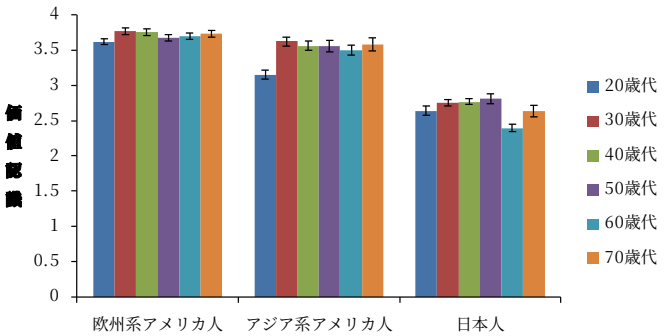


図1. 価値認識の年齢群，文化比較

「価値に沿った行動」においては，文化による主効果（F（5098, 2）$= 309.47$, $p = .00$, $\eta^2_p = .11$；欧州系，アジア系＞日本），年代による主効果（F（5098, 5）$= 24.83$, $p = .00$, $\eta^2_p = .02$; 20 < 30-50 < 60 < 70 代），文化と年代による交互作用の全てが有意であった（F（5098, 10）$= 2.99$, $p = .00$, $\eta^2_p = .01$）。欧州系・アジア系アメリカ人は，年代があがると共に高まる傾向があるのに対して，日本人では，年代による違いが 20<70 代にのみしかみられなかった（図 2）。

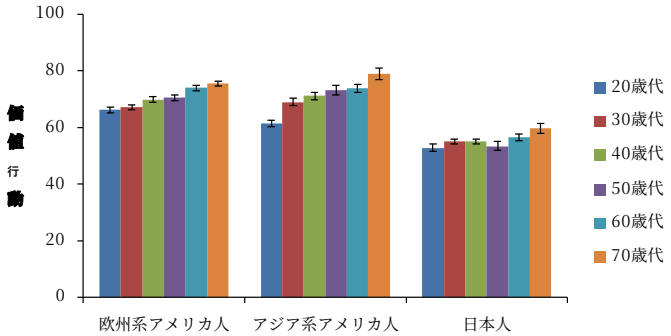


図2. 価値にそった行動の年齢群，文化比較

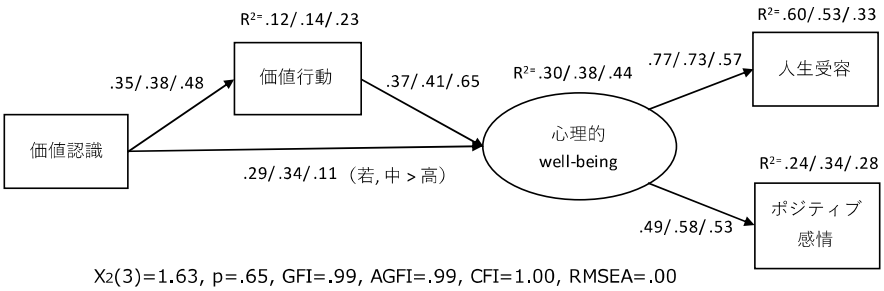
（2）価値認識，価値にそった行動と well-being との関連に関する文化比較

社会文化的背景の違う集団ごとに，若年群（20-39 歳），中年群（40-64 歳），老年群（65-79

歳）に分けて，価値の認識が幸福感に及ぼす影響を，生活の中で価値に沿った行動が媒介するモデルをたて，多母集団同時分析により，年代ごとにパラメータ間の差の検定を行った。

日本人データにおいては，仮説モデルは十分な適合度を示すことが確認された（図 3）。年代によって，パラメータに有意差がみられたのは，価値認識から直接幸福感に向かうパスにおいてのみで，若年群と中年群に比べて高齢群の影響が弱いこと（共に，p <.001）が示された。また，若年群と中年群は直接効果（順に，β ＝.29, .34）より間接効果（順に，β ＝.13, .16）が弱いのに対して，老年群は直接効果（β ＝.11）より間接効果（β＝.31）が強かった。

欧州系アメリカ人，アジア系アメリカ人共に，仮説モデルは不適解となり，日本人とはそもそもの想定モデルが異なることが示された。



$X_2(3)=1.63$, p=.65, GFI=.99, AGFI=.99, CFI=1.00, RMSEA=.00

図3. 仮説モデルの多母集団同時分析による検討（日本人データ）
Note. モデルパス上の3つの数値は左から若年群，中年群，高齢群の値を示す

本研究では，日本人の文化的背景を考慮した比較対象として，全く文化の異なる欧州系アメリカ人だけでなく，アメリカという同じ社会環境でありつつ，受け継がれた文化的背景の似通ったアジア系アメリカ人を取り上げて，3 群での比較を行った。全体的な結果として，アジア系アメリカ人の示す特徴は，欧州系アメリカ人のそれと類似するものであり，価値に対する認識や行動，心理的 well-being は，民族としての文化的背景を反映するものではなく，置かれている社会環境に適応する形で形成されていくものと推測された。

日本人は，価値の認識や行動，人生受容については，年代による統計的に有意な変化がみられず，全体的に低い値を示していた。また，価値の明確化が，価値に沿った行動を促し，心理的 well-being を高めるというモデルを検討したところ，日本人においては十分な適合度が示されたものの，欧州系・アジア系共にアメリカ人においてはモデルが不適解となった。相関分析より，アメリカ人において価値を認識することは，それを生活における行動に反映させることと関連することは確認できるものの，それらと心理的 well-being に関連がほとんどみられなかった。何をもって満たされていると感じるか，幸せだと感じるかは，文化的背景を色濃く反映するものであり，普遍的な well-being と文化特異的な well-being の両側面から，well-being を捉えていく必要性があるといえる。

以上のことから，価値を用いたアプローチにおいては，文化的背景を考慮することは不可欠であり，自分らしい人生の締めくくりの意思決定においても，個々人の置かれている文化や社会といった環境要因を理解し，さらに，その文化的背景によって加齢の影響も異なる可能性を念頭に ACP といった具体的支援につなげていくことが重要といえる。

＜引用文献＞

土井理美ら（2014）．Personal Values Questionnaire Ⅱの内的整合性と妥当性の検証．行動療法研究，40，45-55.

一言英文（2015）．文化的文脈と自己観の整合による肯定的感情―文化内多様性に基づいた検討― 感情心理学研究，22，60－69.

厚生労働省（2017）．平成 29 年度人生の最終段階における医療に関する意識調査報告書

Masumoto, K. et al. (2016). Age and gender differences in relationships among emotion regulation, mood, and mental health. Gerontology and geriatric medicine, 2, 2333721416637022.

Matsumoto, D., Yoo, S. H., & Nakagawa, S. (2008). Culture, emotion regulation, and adjustment. Journal of personality and social psychology, 94(6), 925.

西田裕紀子（2000）．成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究．教育心理学研究，48，433-443.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Masumoto Kouhei、Shiozaki Mariko、Taishi Nozomi	４．巻 15
２．論文標題 The impact of age on goal-framing for health messages: The mediating effect of interest in health and emotion regulation	５．発行年 2020年
３．雑誌名 PLOS ONE	６．最初と最後の頁 e0238989
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1371/journal.pone.0238989	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Masumoto Kouhei、Harada Kazuhiro、Shiozaki Mariko	４．巻 -
２．論文標題 Effect of Emotion Regulation on Mental Health of Couples in Long‐Term Marriages: One‐Year Follow‐up Study	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Japanese Psychological Research	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12325	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yamamoto, K., Masumoto, K.	４．巻 49
２．論文標題 Memory for Rules and Output Monitoring in Adults with Autism Spectrum Disorder.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of Autism and Developmental Disorders	６．最初と最後の頁 4780-4787
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10803-019-04186-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ueno Daisuke、Masumoto Kouhei、Sato Shinichi、Gondo Yasuyuki	４．巻 45
２．論文標題 Age-Related Differences in the International Affective Picture System (IAPS) Valence and Arousal Ratings among Japanese Individuals	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Experimental Aging Research	６．最初と最後の頁 331～345
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0361073X.2019.1627493	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 増本康平
2．発表標題 シンポジウム：加齢の認知神経科学研究の最前線
3．学会等名 日本心理学会第84回大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 増本康平
2．発表標題 Well-beingと未来都市学：レジリエント社会をめざしたヒューマン・ネットワークの構築
3．学会等名 神戸大学未来世紀都市学研究ユニット「Well-being研究拠点」（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 増本康平
2．発表標題 老いの心理学の最前線：心理・行動データが示す人生の最後に重要なこと
3．学会等名 第1回KISC(Kobe Intangible Science Community)セミナー（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 増本康平
2．発表標題 シンポジウム：「思い出」を科学する -自伝的記憶研究の現在と未来3-
3．学会等名 日本心理学会第83回大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 増本康平
２．発表標題 シンポジウム：『今』を意味づけるもの
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masumoto, K., Zhuang, X., Shiozaki, M., & Harada, E.
２．発表標題 Can Elderly Adults Avoid the Anchoring Effect If They Are Forewarned and Motivated to Avoid the Effect?
３．学会等名 The Gerontological Society of America 2018 Annual Scientific Meeting.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田旻・山本健太・増本康平
２．発表標題 認知バイアスにおける加齢の影響-オプションフレーミング課題を用いて-
３．学会等名 日本心理学会第82回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山本健太・増本康平
２．発表標題 成人自閉症者のソースモニタリングに関する研究
３．学会等名 日本心理学会第82回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

1．著者名 増本康平	4．発行年 2018年
2．出版社 中央公論新社	5．総ページ数 216
3．書名 老いと記憶	

1．著者名 増本康平	4．発行年 2018年
2．出版社 ワールドプランニング	5．総ページ数 234
3．書名 最新老年心理学（担当箇所：第7章 高齢者の自伝的記憶）	

1．著者名 増本康平・塩崎麻里子・中里和弘	4．発行年 2018年
2．出版社 北大路書房	5．総ページ数 146
3．書名 シリーズ心理学と仕事6：高齢者心理学（担当箇所：第5章保健・医療）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

データセット：目標フレーミングの年齢差に関するデータ
https://doi.org/10.6084/m9.figshare.10297817.v1

データセット：感情調整の高齢夫婦ペアデータ
https://doi.org/10.6084/m9.figshare.11152580

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
アメリカ合衆国	Stanford University			